

七十の手習い 若者と共に

ぴーふる

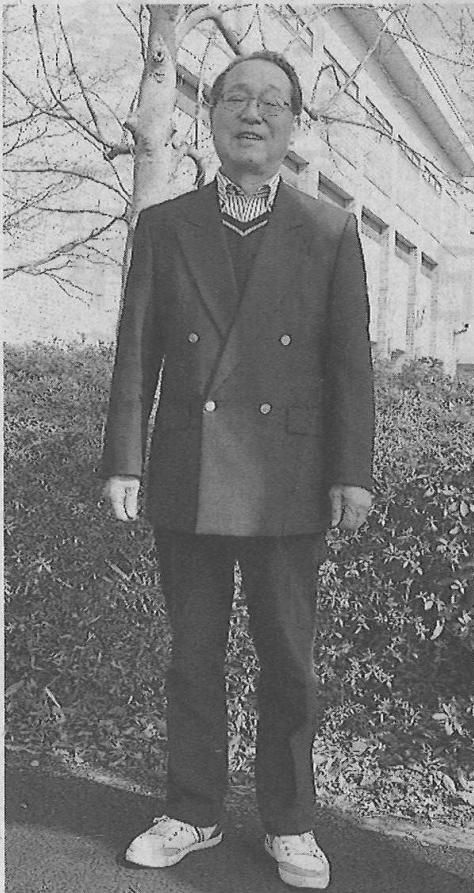
古希を過ぎた身で、孫たちと同年代の大学生とともに筑波学院大学（つくば市）で学んでいる。会社員生活を退いた2016年に入学。第二の人生では日本語教育を学び、異国の地で奮闘する外国人の手助けに専心している。

高校卒業後、食品の賞味期限の印字機器などを製造する都内のメーカーに40年間勤めた。営業担当として全国を飛び回り、常務にまで上り詰めた。

退職前の15年、妻の勧めで日本語教員養成プログラムのある

筑波学院大学で日本語教育学ぶ

井手尾 司さん(71)



同大入学を決意。「毎日が日曜日」の生活より、大学で学び、企業人の経験を社会に役立てるほうが魅力的に思えたからだ。だが、入学直後に心が折れそうになる。若い同級生たちは、授業に必要な連絡を当たり前のようにLINEで済ませていたが、さっぱり分からない。気恥ずかしさをこらえ、同級生にやり方を尋ねると、優しく教えてくれた。学園祭の準備では広告

主集めで営業力を発揮。若い友人に溶け込み、悩みの相談も引き受ける。

大学に頼まれ、週1回、ビジネスに必要な敬語の使い方や客との接し方などを日本で就職するアジアからの留学生らに指導する。中には日本人より丁寧に、時候のあいさつをまじえて感謝の言葉をLINEで送ってくる留学生もいる。

入学を機に都内からつくばに転居した。来春の卒業後も、異国の若者らを支えるつもりだ。

（鹿野幹男）